国分寺遺跡の土馬

調査課　澤村　雄一郎

考古学コラム「きずな」NO.18
平成30年5月7日
岐阜県文化財保護センター

〈はじめに〉

天平13（741）年に聖武天皇は「国分寺建立の詔」により、全国に国分寺の建立を命じました。これは仏教の力により国家を守ろうとしたものです（鎮護国家）。

美濃国に造られた国分寺が美濃国分寺で、現在は史跡公園として整備されています。また、美濃国分寺跡に隣接する周辺部分（国分寺遺跡）でも、国分寺に関連する遺構や遺物が発見されています。

当センターでは、平成28・29年度に国分寺遺跡の発掘調査を実施し、美濃国分寺に関わる遺構や遺物を確認しています。平成29年度の国分寺遺跡の発掘調査で、美濃国分寺跡の南西（写真①）に位置する土坑（写真②）から、埋納された土馬を発見しました。

〈国分寺遺跡の土馬〉

この土馬は、土坑の底から出土しました。半分に断ち割って掘削したところ、尾及び後脚の部分が見つかり（写真②）、残りの半分を掘削したところ、前脚部分が見つかりました。土坑に土馬を埋納したものと考えられます。土坑埋土の上層には短冊形の河原石が２つ置かれていました。

国分寺遺跡の土馬は、背には鞍が表現され、手綱も線刻されています。しかし完全に残っているわけではなく、頸から頭部と左側の前後脚が欠損しています（中央の黒い部分が脚の折られた痕跡）。また、胴の中央で２つに折られています。（写真③）これは、自然に壊れたものではなく、意図的に破壊されたと考えられます。

このように破壊された土馬は、どのような目的で土坑に埋納されたのでしょうか。

〈祭祀に用いられた土馬〉

土馬は、馬の形をした土製品で、役所や役所に準じた場所と推定される遺跡で、溝、運河、井戸などの遺構からよく出土します。また、完全な形で出土することはほとんどなく、一部が欠損した状態で見つかります。土馬の多くは鞍などが装着された飾り馬です。土馬の用途については諸説ありますが、いずれも祭祀に用いられたと考えられています。災いを土馬とともに水に流したとか、牛馬を殺す代わりに土馬を破損して雨乞いをしたといった、水の祭祀に用いられたとする説と、馬は神様（疫病神）の乗り物（土馬に鞍などが表現されていることも騎乗用の馬であることを示しています）で、厄病神は馬に乗って災厄や疾病などの猛威をふるい暴れまわるため、厄病神の動きを封じるために、土馬を神様の乗る馬に見立て脚を折ることで、疫病神を動き回れないようにしたといった、災厄を鎮める祭祀に用いられたとする説です。

① 史跡美濃国分寺跡・国分寺遺跡全景（●が土馬の出土場所）

② 土馬の出土状況

③ 国分寺遺跡で見つかった土馬

〈おわりに〉

今回見つかった土馬は、厄病神を鎮めるためか、雨乞いか、何らかの祭祀に用いられ、埋納されたと考えられます。

当時の美濃で、疫病がはやったのか、日照りが続いたのか、土馬を用いた祭祀を行うことになった理由を考えてみるのも面白いかもしれません。

〈参考文献〉
金子裕之　1985「平城宮と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集
水野正好　1978「馬・馬・馬－その語りの考古学」『文化財学報』第２集、奈良大学